月例研究発表要旨

第242回　2009年4月15日
「中野知律・越智博美編著『ジェンダーから世界を読むII――表象されるアイデンティティ』合評会」

井川ちとせ

2008年12月に明石書店より刊行された『ジェンダーから世界を読むII――表象されるアイデンティティ』の合評会をおこなった。本書は，2007年度から始動した「一橋大学における男女共同参画社会実現に向けた全学的教育プログラム」初年度の「基幹科目群」のひとつ，「総合科目（学際テーマ）ジェンダーから世界を読む」担当教員が，各々の講義をもとに執筆を分担したものである。執筆者14名全員が一橋大学語学研究室のメンバーであることから，従来の例会とは趣向を変え，合評会を開催する運びとなった。語学研究室のメンバー以外からコメンテーターをお招きしたのも新しい試みである。学外からは早稲田大学教育・総合科学学術院の小林富久子氏に，学内からは社会学研究科の貴堂嘉之氏にお越しいただき，執筆者のひとり井川ちとせを加えた3名によるコメントののち，質疑応答をおこなった。また，三浦玲一氏が司会を務め，会に先立ち，この日に訃報が伝えられたイヴ・K・セジウィック氏への哀悼の意を表した。

まず最初に，小林氏が，70年代後半より日本における女性学・アメリカ文学研究を牽引し，2000年より早稲田大学ジェンダー研究所所長として全学的教育に携わってきた立場から，本書の研究書としての側面と学生向けの教科書としての性格の双方に注目し，14篇すべてに細やかな論評を加えた。執筆者の専門領域が多岐にわたり，扱う主題も様々であるが，各論考のあいだに響き合いが感じられると指摘し，とりわけ男性性規範の変遷と帝国主義やナショナリズムとの関係を考察する論考が目立つことに注目し，20世紀から21世紀への転換期にあたる今日，グローバリゼーションの進行にともなう新たな男性性の構築を，警戒心を持って見守る必要性を読み取った。また，藤野氏に対して，専業主婦願望や母―娘関係を問題化する際の小倉千加子の姿勢について，三浦氏に対しては，バトラーの議論とアイデンティティ・ポリティクスとの親和性について，それぞれ質問を投げかけた。

つづいて貴堂氏は，本学のジェンダー教育プログラム（GenEP）の総括責任者およびジェンダー社会研究センターの共同代表として，本書の教育的効果に関心を寄せた。また，1996年に木本貴美子・関啓子の両氏が編んだ『ジェンダーから世界を読む』と本書との，狙いや特徴の類似と相違に注目し，ことに，前者で社会学や地理学の専門家たちが提示したのとは異なる，言語文化表象の研究者独自の問題群とはどういったものなのか，説明を求めた。貴堂氏は，ジェンダー研究が，リアルに経験される抑圧や差別の実証的な掘り起こしを積み重ねてきた経緯に触れ，川本論文・金井論文のテクスト分析に示されたようなアプローチのさらなる可能性に言及した。貴堂氏

はさらに，アメリカ史研究者として，越智論文に言及した。すなわち，越智論文が，アングロ＝サクソン優越主義的な社会的・政治的テクストとしてのターザンの機能に焦点を当てたのに対して，都市あるいはビジネスの世界で台頭する黒人ミドルクラスを対比する視座と，黒人の社会的可視化の問題を併せて考察する可能性を示唆した。

最後に井川が，4篇に絞ってコメントをした。藤野・三浦両氏に対しては，上述の小林氏と同様の質問をおこなった。藤野論文中の「フェミニズムの議論の場が，男と女の関係から，母と娘の関係に移った，ということなのか」との問いに対しては，フェミニストによる母―娘関係についての議論が近年目につくとしたら，それは，フェミニズムが，階層的な秩序を有する父権性への異議申し立てとして出発し，父―息子を連想させる世代間の垂直的葛藤ではなく，女の水平的な連帯を強調する傾向にあったことと無縁ではないのではないかと指摘した。小林氏が2006年の著作で，日系女性作家における母―娘関係のテーマに一章を割き，西洋文学の伝統において母―娘の物語がメイン・プロットの影に「暗黒」の領域として隠され，そのテーマの重要性を認知することを困難にしてきたと分析していることにも言及した。「パックスは結婚に近づきつつある」と結ばれる小関論文に対しては，結局のところ，法律婚を事実婚より高い位置に置くパックスは，フランスが婚姻を中心に据えた社会であることを示す政治的効果として機能してはいないか，またバトラーが論じるように，今日の政治的文脈で1940年代の構造主義の枠組みが持ち出されるのは，移民と，非異性愛の親族関係を規定する欲望，双方への不安からではないか，と質問を投げかけた。柏崎論文では，『女大学』の言説が，思想的・宗教的根拠を一切伴わず展開していることが見事に看破されるが，その根拠の無さもまた，このテクストを普及させる力として作動したのではないかと指摘した。

なお，本書に収められた論考とその著者は，以下の通りである。

Ⅰ　理論篇　ジェンダー研究の地平を見る
　第1章　ジェンダー・アイデンティティという虚構（井川ちとせ）
　第2章　なぜ小倉千加子は，フェミニズムは失敗した，と言うのか
　　――あるいは，フェミニズムのジェンダー論的転回について（藤野寛）
　第3章　マイノリティの政治と性的差異
　　――ジュディス・バトラーと現代のセクシュアリティの配置（三浦玲一）
Ⅱ　実践篇1　ジェンダーから現代社会を見る
　第4章　パックスに見る現代フランスのパートナーシップのあり方
　（小関武史）
　第5章　女であること，アジア人であること――現代英国の文化闘争
　（中井亜佐子）
　第6章　現代ドイツ社会における女性像
　（清水朗）
　第7章　中国農村女性のジェンダー問題
　　――地域における女性の政治参加をめぐって（南裕子）
Ⅲ　実践篇2　ジェンダーから歴史・文化の表象を見る
　第8章　江戸時代の女性観（柏崎順子）
　第9章　ジェンダーとネイションの再構築――マライア・エッジワース『ベリ

ンダ』(1801)(吉野由利)
第10章　マッチョ・ヒーローの誕生――男性性の再編成と文学表象(越智博美)
第11章　妄想と想像のあいだ――C・P・ギルマンの「黄色い壁紙」再考(川本玲子)
第12章　ベル・エポックが恋した「ムスメ」たち(中野知律)
第13章　アンドレ・ジッド『贋金つくり』とホモソーシャル共同体(森本淳生)
第14章　タイタニックを読む(金井嘉彦)

第243回　2009年5月27日
「初修外国語の短期語学研修について」

例会担当運営委員　三浦玲一

●はじめに

語学エリアによる海外研修としては，1990年から2002年にかけて行われた中国語エリアによる先駆的なプログラムがある。2008年度に新たに英語エリアで海外語学研修を始めるまでの期間においても，語学エリアにおいては海外語学研修実施の可能性が探られたが，大学側の運営体制や危機管理体制が整わない中で海外語学研修を運用した際に生じる様々な問題(例えば，なにか問題が起こった場合の責任問題，教員の同行等負担の問題，大学の授業の一環とするのに必要なプログラムの質の確保の問題，安くはない費用を学生に負担させる問題，それに付随して経済的に余裕のある家庭の学生しか参加することのできないプログラムを，しかも選択必修あるいは必修の授業として開講することの是非等の問題)が大きな障壁となって実現するには至らなかった。2008年度に英語エリアが海外語学研修を始めるにあたり，大学側の体制の整備と問題の整理が行われたのを機に，語学エリアでは英語以外の語種においても海外語学研修を開始することの検討を始め，ドイツ語，フランス語，中国語，ロシア語の各エリアに，派遣候補先に調査をしに行っていただいた。今例会では，その調査結果を報告していただいた。

(語学研究室室長　金井嘉彦)

●フランス語の場合

フランス語エリアでは，フランス語短期語学研修実施の可能性を調査するため，2009年3月にフィリップ・ドゥニオ教師がアンジェとトゥールの語学学校を訪問した。いずれもフランス語教育に実績のある学校である。

時期としては9月，期間は4週間が適切であろう。対象となるのは学部の2年生から4年生までで，学習を始めたばかりの1年生には厳しいと思われる。大学院生を対象に含めるかどうかは検討を要する。

いずれの学校においても，一橋生のための特別クラスを設定することはない。日本人だけのクラスでは教育効果が上がらないし，一定の人数を確保する義務も課せられるからである。したがって，参加者は能力テストを受けたうえで，既存のクラスに振り分けられることになる。6段階のうち，下から2番目または3番目のレベルが想定される。1クラスの人数は15人から20人までとなる。授業時間は，週当たり80時間または90時間である。これに遠足企画などの文化プログラムが加わる。

滞在方法は，9月実施の場合，両校ともにホームステイとなる。朝食と夕食はステイ先の家庭で提供される。

最大の問題は，料金の高さである。授業料は約1000ユーロである。滞在費用（宿泊費と食費）にもほぼ同額を要する。交通費（往復渡航費とパリからの鉄道料金）などを加算すると，日本円に換算して50万円ほどを見込まなければならない。ドイツなど他のヨーロッパ諸国と比べて割高である。大学からの資金援助が望まれる。

もう一つの問題は，教員の負担である。現有スタッフの数を考えると，毎年の引率は不可能である。この点に関しては楽観的な意見もあるようだが，引率の義務に関して判断を下すのはわれわれ教員ではなく，事務方であろう。他の言語の先例に倣うなら，出発前の準備講義や引率が課せられるのではなかろうか。

フランス語短期語学研修を実施する場合，受入先となる学校の調査は完了した。しかし，参加者への資金援助が得られるかどうか，教員の負担がどの程度になるか，といった要素が不透明であるため，語学研修をすぐに実施できる態勢にはなっていない。

（小関武史）

●ドイツ語の場合

ドイツ語エリアでは，2010年度から「短期語学研修」制度をスタートさせることで合意が成立し，2009年3月にラルフ・デーゲン准教授がドイツに出張，七つの大学（アーヘン，ザールブリュッケン，デュッセルドルフ，フランクフルト，フライブルク，ライプチヒ，ワイマール）の語学サマーコースの内容を調査した。その調査結果に基づき七つの大学のプログラムを比較検討した結果，第一候補にワイマール大学，第二候補としてフライブルク大学を選び，デーゲン准教授が現地で収拾してきた資料，および撮影してきた写真をもとにそれぞれについて紹介したのが，今回の報告である。ドイツの大学が提供するサマーコースは授業料を始めとして必要経費が安く，学生には少ない経済的負担で充実したドイツ語学習が可能であることが示された。

なお，その後，研修先はワイマールのバウハウス大学に決まり，2010年8月の語学研修への参加（一橋大生に割り当てられた定員は20名）に向けて，準備が進められている。　（ラルフ・デーゲン，藤野寛）

●ロシア語の場合

ロシア語エリアでは2009年2月末に現地調査を行ったが，その内容は以下のとおり。

【スケジュール】 2009年2月25日〜3月2日

【訪問先】 サンクトペテルブルグ大学，サンクトペテルブルグ教育大学，サンクトペテルブルグ文化・芸術大学の三大学を訪問した。特に教育大学では，日数と受入可能日，クラスの人数とレベル・カリキュラムの内容，寮施設・食事環境，費用ならびに事務手続き等につき，相手方の実務担当者も参加して具体的なシミュレーションを行った。

【結論ならびに問題点】（1）夏季休暇中（8月）の語学研修へ派遣する上での基本的方向性に関しては，期間・カリキュラム・費用・アコモデーション等の点で大きな障害は見られない。（2）ただし，ロシアのヴィザ取得にかなりの時間がかかる（最大三ヶ月）ことから，新年度4

月末までに派遣希望を確定しなければならない。(3) したがって新一年生に呼びかけるのではなく，中級以上のロシア語履修者（ゼミ生，大学院生を含む）を派遣するための良質な情報の提供と勧誘・相談のシステムの構築が望まれる。

（坂内徳明）

●中国語の場合

中国語エリアでは以下の要領で短期語学研修を考えている。

【実施時期】 春2月下旬〜3月初旬。

【対象学生】 全学年に公開。

【定員】 30名を上限とする。レベル別にクラス編成／10名×3クラス。

【受け入れ先】 上海財経大学国際文化交流学院

【滞在／学習期間】 滞在14日間，授業日数10日，1日4時間×10日間＝40時間

【授業内容】 コミュニケーション力の強化。会話練習，発音矯正に集中する。なお，学生側の希望が強ければ，現地企業，経済活動などの参観の手配も可能。

【宿舎】 上海財経大学キャンパス内の留学生用宿舎。2名1部屋を利用。

【引率・同行など】 起動当初を除き，中国語エリア教員の負担とはならないようにする。

【成績認定】「中国語中級」として2単位を認定。参加者には参加翌年度に「中国語中級」を必ず履修させ，その分の単位として，翌年度夏学期に認定。現地研修終了後，試験を実施，本学のA〜F成績の趣旨に則り採点，認定する。

【費用（概算）】 ￥137,000

（笹倉一広）

第244回　2009年6月17日

「未来派から遠く離れて ── ウルフ・未来派航空劇・マニフェスト芸術」

河野真太郎

本報告では，イギリスのモダニズム作家Virginia Woolfの作品と，ひろくアヴァンギャルドとを比較した。

ただし，ウルフとヨーロッパ大陸のアヴァンギャルド芸術運動とを，実証的に比較することは，本報告の目指すところではなく，両者がもっとも広い意味でのアヴァンギャルド＝前衛の問題を共有していたことを示すことを，本報告は目指した。

まず，そのために予備的な作業として，近年のアヴァンギャルド論の展開を整理した。1960年代から70年代のアヴァンギャルド論として影響力が大きかったのは，レナート・ポッジョーリの『アヴァンギャルドの理論』，ペーター・ビュルガーの同じく『アヴァンギャルドの理論』，そしてマティ・カリネスクの『モダンの五つの顔』であった。ジェイムズ・ハーディングとジョン・ラウズの*Not the Other Avant-Garde*は，この「御三家」のアヴァンギャルド論に大きく二つの批判をする。ひとつは，これらの議論のヨーロッパ中心主義と，それにともなうリニアな歴史観である。そしてもうひとつは，「御三家」が三者ともアヴァンギャルドのパフォーマティヴィティという次元を見落としているという点である。

この二つの批判を，「マニフェスト」という切り口で一気に解決してみせたのが，マーティン・プッチナーの*Poetry of the Revolution*であった。マルクスとエンゲ

ルスの『共産主義宣言』以来の，政治的マニフェストとマニフェスト芸術を同一平面上におくことで，プッチナーはマニフェストという言語ジャンルの行為遂行的な側面が，芸術と政治の分離をつねに切りくずすものであることを示した。プッチナーに先行する重要なマニフェスト研究として触れておかねばならないのが，ジャネット・ライアンの *Manifestoes: Provocations of the Modern* である。

以上のように，近年の前衛論・マニフェスト論は非常に興味深い展開をみせている。本報告で焦点を当てたのは，アヴァンギャルド論のうちでも比較的古い問題である。つまり，「御三家」が格闘した，モダニティの最終段階としてのアヴァンギャルド，政治と芸術の分離と再統合の問題である。

そもそも，政治と芸術といった分断を切り崩すことこそが，前衛の大きな特徴であった。プッチナーはマニフェスト形式のパフォーマティヴィティに注目することでその側面をみごとに描いてみせた。だが，前衛をもっとも広い意味へと投げ返す，という際に，パフォーマンスやパフォーマティヴィティという概念は，最終的には不十分であることが明らかになり，最終的に見据えられるべきは，「アクション」の水準であることを本報告は主張し，それをレイモンド・ウィリアムズの批評に見いだすことを試みた。

以上のような理論的考察をもとに，本報告ではウルフの『ダロウェイ夫人』，F. T. マリネッティおよびおなじくイタリアのアヴァンギャルドであるフェデル・アザーリの「未来派航空劇場」，さらにはイギリスのアヴァンギャルドであるウィンダム・ルイスなどに頻出する飛行機のモチーフを検討した。これらの作家たちにおける飛行機のモチーフは，群衆とそれを表象する芸術（家）の問題に収斂することが確認され，その意味で，ファシズム的なものに親和性の高い未来派やルイスと，その正反対とみられることの多いウルフのリベラリズムは，表裏一体であることが確認された。ウルフ的・ブルームズベリー的なリベラル個人主義は，ウィリアムズが示したように，現在では自然化した「前衛」だったのである。

最後に本報告では，ウルフの『三ギニー』を，プッチナーの重視する「マニフェスト」形式として，そしてより正確には遅れてきた「メタ・マニフェスト」形式として検討し，ウルフが広い意味での「前衛」的なものと生涯にわたる交渉を行っていたことを示した。

第 245 回　2009 年 7 月 15 日
「「ヴェール」の自伝
――近代，フェミニズム，多文化主義」

中井亜佐子

抑圧の象徴とみなされがちな，イスラム女性の「ヴェール」。その一方で近年，中東やヨーロッパの都市部でヒジャブ（ヘッドスカーフ）やジルバブ（全身をゆったり覆う外套），ニカブ（顔を覆うマスク）を身に付ける若い女性が増えている。こうした現象は，若者による西洋文明の拒絶と解釈されることが多い。本発表の目的は，この「女性の抑圧か，西洋文明批判か」という二者択一的論争を乗り越え，英語圏における「ヴェール」言説を多角的に再検討することであった。

1.「ヴェール」は個人の自由か？

2008年度にいくつかの授業で，シャビーナ・ベーグム事件（英国のバングラデシュ系2世の女子生徒が，ジルバブを着て登校する権利を主張して学校を訴えた事件）を取り上げた。授業で私が学生に提起した問題は，①女子生徒のジルバブを着る「知性」や「自由意志」が，英国多数派によるイスラム批判への応答として立ち上がった，パフォーマティヴな発話であるということ，②（皮肉にも）彼女の主張は異文化に属するものではなく，西洋自由主義思想（個人の自由意志の尊重）に依拠していること，③多文化主義と自由主義の共犯によって「自らの意志でヴェールを身に付けるイスラム女性」が構築され，テレビ放送，YouTubeといった「民主的」メディアに乗って流布し，最終的には反イスラム言説の強化に与しているということ，の3点である。

2.「ヴェール」と近代化

何よりもまず，イスラム女性の「ヴェール」とは，オリエンタリズムや近代化理論といった西洋の支配的言説の一部なのである。多くのイスラム圏では，近代化を促進する国家政策の一環として，女性のヴェールが廃止された。しかしこうした国々では，ヴェール着用が近代化（すなわち西洋化，植民地化）への抵抗の手段となることもあった。フランツ・ファノンは「女性のヴェールを剝ぐこと」を「西洋によるイスラムのレイプ」に喩えるとともに，「ヴェール」そのものが植民地戦争を戦う武器となったことを指摘する（アルジェリア戦争中，多くの女性がヴェールの下に兵器を隠して運んだ）。トルコ，エジプトでは1970年代以降，都市部の知的階層を中心に，ふたたびヴェールを着用する女性（フェミニスト）の集団が出現している。

3.「ヴェール」とフェミニズム

しかしながら，ヴェール論争は，単純に「近代化＝西洋化に抵抗するイスラム」の問題としてのみ捉えることはできない。とくに英語圏における論争の特徴は，その担い手が移民やその2世，改宗者などであることから，複数の地域あるいは文化間の物理的，精神的な移動が議論の下敷きにある点である。オーストラリア出身の白人女性でイスラムに改宗したキャサリン・ブロックは，ヴェールを一面的に「抑圧」か「抵抗」かのどちらかだと判断するのではなく，特定の社会的状況においてその都度，ヴェールの意味を検証しようとする（Katherine Bullock, *Rethinking Muslim Women and the Veil*, 2002）。ヴェール着用のフェミニスト的意義を主張するとき，ブロックはまず，西洋フェミニズムの視点から見たヴェール着用の問題点を挙げ，それに逐一反論していく。すなわち，彼女のヴェール擁護論は，改宗を経て二重化された意識を通じて，初めて成立する議論なのである。

ヴェールの意味の多様性，決定不能性を強調する「ポストモダン」ヴェール論の例としては，近年カリフォルニア大学出版局から刊行された論集『ヴェール』（Jennifer Heath ed., *The Veil*, 2008）が挙げられる。編者のジェニファー・ヒースは，ヴェールの問題はあくまで着用する個人の選択の問題であると主張しているが，こうした考え方は，植民地支配や国家権力への抵抗の一形態でもあったヴェールの公的な意味を追求することを放棄し，問題をふたたび私的

な領域に閉じ込めてしまうことにつながりかねない。一方，若者のイスラム回帰が注目される英国の移民研究においては，「イスラム」とは多数派英国人の権力に対抗する移民の公共圏の一つであり，ヴェールは移民女性がそうした公共圏に参入するための重要な宗教実践であるという見方がある。あるいはまた，アンシューマン・モンダルのインタヴュー調査によれば，多くの若者は父権的なアジアの伝統文化と宗教とを峻別し，「文化によって歪められていない真のイスラム」に回帰することを主張している（Anshuman Mondal, A. *Young British Muslim Voices,* 2008）。こうした主張は，少なくとも理念上は，文化的差異を超えたグランド・ナラティヴを志向するものであり，若者のイスラム回帰を差異の主張と捉える一般論とは大きく異なっている。

4.「ヴェール」の自伝

現在私が関心を抱いている研究対象の一つは，20 世紀初頭に中東から欧米に移住した女性たちの自伝である。たとえば，オスマン帝国の終焉前後にアメリカに移住したセルマ・エクレム（Selma Ekrem）というトルコ女性は，『ヴェールを脱ぐ』（*Unveiled,* 1930）と題された自伝をアメリカで出版している。「ヴェールではなく帽子を被るため」アメリカに移住したエクレムは，トルコについて講演することで有名になり，アメリカン・ドリームの体現者となる。自伝の結末ではトルコに一時帰国し，共和国体制のもとでヴェールが廃止されたことを知って喜んでいる。一読するとエクレムは，近代化による女性解放という帝国主義言説／新生トルコの国家言説に無邪気に与している。しかし彼女は，「自由の国」アメリカの「不自由」を巧妙に批判すること ── 1920 年代のアメリカの消費社会にもまた，顔のない，ヴェールに覆われた大衆の存在すること ── を忘れてはいない。その意味においてエクレムは，現代英国の移民女性，シャビーナ・ベーグムの先駆者でもある。一方はヴェール着用を主張し，他方はその廃止を訴えているにもかかわらず，いずれの女性も，「自由」という近代思想を奪用することによって，文化的差異を主張する有能な多文化主義者へと，みごとに自己形成を果たしたのである。

第 246 回　2009 年 10 月 28 日
「エスのあったところに緑をあらしめよ ── ジョン・ハーグレイヴ論 ──」

中山　徹

建築家はいった。「機械文明の第二の時期」「それは調和の時期，機械が人間に仕える時期である」（ル・コルビュジエ『伽藍が白かったとき』）。哲学者はいった。「近代技術は生活必需品を確保するのに必要とされる労働の量を激減させた」。「近代技術をもってすれば……余暇を分配することが可能であろう」（Bertrand Russell, *In Praise of Idleness*）。大戦間期，ひとはバラ色の時代を迎えるはずだった。しかし眼前には，むしろ理屈と現実とのギャップが開かれていた。小説家はいらだった。なぜ産業先進国に失業者があふれるのか。過剰生産のためだ。なぜ過剰生産なのか。生産手段の改良のスピードに消費力の発達のスピードが追いつかないからだ。ありあまる商品，それゆえの過剰な低価格，それゆえの生産制限，それゆえの失業（Aldous

Huxley, “The Victory of Art over Humanity”)。こうしてひとは「豊かさのなかの貧困」という逆説，過剰生産と過少消費の悪循環に入り込んでいく。そう，機械と失業者，そして彼らによって買われることのない商品に満ちたデパートからなる『モダン・タイムズ』の世界に。詩人は憤った。「十分なモノがあり，溢れんばかりのモノを生産する溢れんばかりの能力がある。どうして誰かが飢えなければならないのか」(Ezra Pound, “ABC of Economics”)。

アマチュア経済学者は考えた。生産物の価格は，賃金・俸給・配当など個人に向けられる部分（A）と原材料費・利子費用・減価償却・税金など他機関に向けられる部分（B）の和によって決まる。とすれば，個人の購買力（A）は原理的に価格（A＋B）に追いつくことはない。このギャップを埋めるには「国民配当」によっていわば消費力を分配するしかない。それは結果的に余暇の分配につながり，失業と販路不足の手っ取り早い解決法である戦争を抑止するだろう。ケインズが「異端」として切り捨てた，この素人的な，あまりに素人的な理論，提唱者の名を冠して「ダグラスのA＋B定理」と呼ばれたこの理論は――その影響を文学者にかぎっていえば――エズラ・パウンドに数々の解説文・紹介文を書かせ，T・S・エリオットを魅了した。それだけではない。やがてここからはジョン・ハーグレイヴという特異な急進的ダグラス主義者が生まれる。20年代，独自のボーイスカウト運動the Kindred of the Kibbo Kiftのリーダーでならしたハーグレイヴの，30年代における変貌はめざましい。パウンドやスタインベックに激賞された途方もない「ジョイス的」小説*Summer Time Ends*を書いた彼はまた，ダグラスの「社会信用」論を綱領とする――ファシストの「黒シャツ」に向こうを張った――「緑シャツ」運動を組織するにいたるのだ。

「われわれの問題の半分は心理的なもので，もう半分は経済的なものである」(John Hargrave, *The Confession of the Kibbo Kift*)。ダグラスが「経済的」問題の解決策であったとすれば，「心理的」問題の解決策はなんであったのか。一つは服装の変革（活気ある人間は活気ある色を使う，労働者のチャップリン服をはぎとって，緋色の服を与えよ！）である。これは，労働者が正気にもどるため「赤いパンツ」をはいて踊ることを説いた「チャタレー夫人の恋人」メローズに転生するだろう。もう一つは，同時代のダンス文化とも共通する，ある種の無意識の解放――歌，ダンス，ハイキング……スカウトの基本的身体運動によって開かれた「五感という媒体」を通じて「有機体の生命における振動リズム」が働く「下位意識の影の世界」を感知せよ！――である。「Kindredは大いなる直観の流動――創造的混沌のゆりかご［無意識］――から形成される」。俗流フロイト主義？　確かに。だが，ここにこそハーグレイヴの可能性の中心があるとしたら，どうだろうか。

注目すべきは，この実践が自然環境を必要としつつも，それが特定の場所を意味しないということだ。Kindredは鍛錬の場を求めて，徒歩で，自転車で，ときにはオートバイ（！）で荒野に向かい，群衆ひしめく都市を通り抜けてゆく。ハーグレイヴがKindredの活動を「新しいノマド」と呼んだ所以である。「新しいノマド」に国境はない。生命の「振動リズム」に同調するた

めの実践は，どこで行われてもかまわない。われわれはここにこそ――血と大地，民族と土地……なんであれ，そうした場と存在との有機的結びつきを前提としない態度にこそ――フロイトを読み取るべきだろう。そう，○○人は○○地帯に住んでいるという固定的分布に満足する民族自決主義者を揶揄した，あのフロイトを。フロイトは，「かつてエスであったところ」，つまり「自我無縁性」の心的領分に「自我はあらねばならない」と語った。それは「ゾイデル海干拓のような文化事業」である，と。ハーグレイヴの説いたマシンエイジのノマドは，そうした本来人間が住まない，しかし同時に新たな人間をあらしめる場所へ向かう運動ではなかったか。そうだとすれば，Kindred の発展形態たる「緑シャツ」運動のモットーは，こうなるはずである。かつてエスであったところ――「人格の暗い部分」――に緑をあらしめよ。

第 247 回　2009 年 12 月 16 日
「マラルメと第三共和制
　　――民主主義社会の文学」

佐々木滋子

1871 年のパリ・コミューンはマラルメに，「歩道の敷石を揺るがす［…］民衆」の出現，言い換えれば自己の存在の「虚無」と戦う政治的主体となった民衆の出現を教えた。だが，この「民衆」はまだ，「虚無」を言語化することによって乗り越えようとする文化的主体とはなりえていない。この事態は言い換えれば，彼らが「虚無」を言語化する形式となったものこそが，つまり彼らを真正な受け手として獲得したものこそが，新たな時代の文化的覇者となりうることを示している。したがって，3 度目の正直の新生共和国において必要なのは，民衆が文化的主体として出現すること，そして同時に，彼らを受け手とする新たな文学形式を生みだすことである，これが 71 年にパリに帰還しようとしているマラルメの重大な，おそらく唯一の関心事であったはずだ。70 年代のマラルメの一見多岐に亘る活動（ロンドン万博探訪記事，『最新流行』の執筆と公刊，ロンドンの新聞『アシニーアム』に送った美術・演劇・文芸の「ゴシップ」記事，美術批評，国際詩人連盟の組織化，『文芸共和国』の創刊）や，外国の通信相手にだけ打ち明けられていた「抒情的で魔術的で民衆的なドラマ」の計画は，新たな読者層の開拓と新たな書き手の創設，さらには，もはや狭義の「文学」の枠にはとどまらない，多様な芸術形式を包含した新たな芸術の創造の企てと見るとき，初めてその一貫性を明瞭に提示する。

だが，80 年代のワグナー論や演劇批評に見出されるのは，民衆の側の文化的主体となろうとする明らかな欲望の存在（「飢えのように，夜毎，地平線が輝く時刻に開かれる，人類の内に，穿たれたこの穴もしくは期待――社会的配置が入念に誤認し欲求不満にしているシメールのあぎと――」）にもかかわらず，共和国とその既存の文化装置（たとえば演劇）が，この「飢え」にまったく配慮していないばかりか，詩人を「美の公式なさまざまな展開へのいかなる参与からも排除」しているので，かろうじて音楽だけがこの「飢え」を満たしている（「平凡さの日曜日の洗濯」）という状況である。

したがってマラルメは，1894年イギリスで行った講演，『音楽と文芸』において，「〈文芸〉のようなものが存在するのか」と根本的な問いを発せざるをえない。もちろんこの問いには，ほとんど直ちに，「あらゆるものを除外して」文学だけが存在する，という答えが与えられるのだが，同時に彼はそれが，文学に携わる人々すべてが「危険なものとして，穏やかに回避」している，文学に関する「唐突な疑惑」に対して，「ある誇張」によって答えたものでしかないことも認めねばならなかった。

マラルメのこの問いは，今日，彼の時代以上に根本的で緊迫したものとして現われている。マラルメの後期散文を読み返すことで，今日，この問いにいかなる解答を提出できるのかを検討したい。

第248回　2010年2月17日
「ラスキン『ヴェニスの石』巡り」

井上義夫

1851年に第1巻が，1853年に第2，第3巻が出版されたJohn Ruskinの*The Stones of Venice*はヴェニスの建築，美術に関する書であるというに留まらず，人間についての深い洞察に満ちた文明批判の書でもある。しかし，その大部さと専門性，ときに脱線して冗長に流れるラスキンに独特な記述法と難解な文体のために，現在一般読者には近づきがたい著作になっている。英米，フランスでも，適宜抜粋した，テキストとしては実に不完全で杜撰な縮約版しか出版されていない。日本には幸い完訳版と縮約翻訳版が出版されているが，残念ながら，当然にも翻訳の上でかなりの疑問点を残している。

今回の発表では，この著作全体の構成について述べるとともに，私自身が数度にわたりヴェネチアを訪ねて撮影した写真を紹介しながら，特に第2巻第2章で扱われるトルチェッロの教会，同巻第8章で問題とされるドゥカーレ宮殿の彫刻について説明した。

加えて，ラスキンがプルーストやヴァージニア・ウルフに影響を与えたと思われるその文体の上の特徴について，第2巻第4章「サン・マルコ寺院」第13，14節の以下の文章の原文とフランス語訳を示しながら説明した。

十三さらに一，二ヤード進むと，旅籠「黒鷲亭」にさしかかる。外側の壁に取り付けられた，深彫りのある四角い大理石の扉ごしに，葡萄の蔓が這った四阿（あずまや）が古い井戸に影を落としているのが見え，井戸の側面には先の尖った楯が彫り出されている。こうして間もなく，私たちは橋の上に現われて，その場所がカンポ・サン・モイーゼということになるが，ここから「ボッカ・ディ・ピアッツァ」（広場の口）と呼ばれるサン・マルコ広場への入口に至る部分では，ヴェニスらしい特徴は破壊されてほとんど跡をとどめない。第一に，別の機会に立ちどまって調べることになるサン・モイーゼ教会のおぞましいファサードのために，次には広場に近づくにつれて現われる近代的な店舗のために，さらには下層のヴェニス市民に入り混ってあたりをぶらついているイギリス人とオーストリア人の集団のためである。しかし足早に彼らを掻き分け，「ボッカ・ディ・ピアッツァ」の果てに柱群の影が落ちているところまで行くと，そ

の種のものはみな忘れてしまう。というのも，柱のあいだから大きな光が広がり，その只中に，ゆっくりと近づくにつれて，サン・マルコ寺院の巨大な塔が，市松模様の石の原から湧き上がってくるように思えるからである。その両側には，数えきれぬほどのアーチが左右対称となって拡がる。それはまるで，薄暗い道の両側でぎゅうぎゅう詰めになり，ごつごつした不揃いな格好をして私たちを上から圧していた家屋が，魔法の杖の一振りで急におとなしくなり，美しい秩序の下，粗雑な窓と壊れた築地が変身して，見目よい彫像のあるアーチと縦溝彫りの施された肌理（きめ）細かな石柱に変ったかのようである。

十四それらが退却するのは道理というもの。なぜなら，秩序立ったアーチの隊列の彼方で，地中から一つの幻が湧き上がり，偉大なる広場は，言わば畏敬の念から道を空け，遠くから私たちが眺められるよう計らったように思えるから。無数の柱と白いドーム群が変性し，新たに生まれた，低くて横に長い，光の彩りのピラミッド――一部は黄金から，一部はオパールと真珠貝からなる財宝の山――そんなふうに見えるものが，下方を扶（えぐ）られ，円天井のある五つの大きなポーチとなり，天井には美しいモザイクが張られ，琥珀のように透明で象牙のごとく繊細な雪花石膏の彫刻に囲まれている。椰子の葉と百合，葡萄と石榴（ざくろ），枝のあいだでくっ付いたり羽博いたりする鳥――それらが綯（な）い交ぜになり，途絶えることなく，蕾と羽根の網細工を作りあげる複雑で幻想的な彫刻――。その中央に，厳かな姿の天使たちが，王杖を手にし，足まで届く長衣をまとって前屈みとなり，入口を挟んで向き合っているが，彼らは，傍の葉のあいだから微光を発する金地のために，朧（おぼろ）に霞む。その薄い黄金の光は，遠い昔，エデンの園の入口が天使に護られていた頃，朝の光が園の叢林に紛れ込んで薄明りになったかのよう。入口の周囲の壁には，多種多様な石の柱がつけられている。碧玉と斑岩，雪片模様がまだらに散った濃い緑の蛇紋石，そして，クレオパトラの「接吻を待ついと青き静脈」にも似て，陽光を半ば拒み半ば受け容れる大理石――その淡青色の起伏は，忍び出してきた光が陰をつくるとき，引潮が砂地に残す波形模様のごとく，一本一本まざまざと浮き上がってくる。柱頭部分は込み入っていて，狭間飾りと根のある草の固り，漂うようなアカンサスと葡萄の葉，十字架で始まり十字架で終る神秘的なシンボル――それらが複雑に絡み合う。その上の幅の広い飾り迫縁（アーキボールト）では，途絶えることのない言語と生命の連鎖――天使と天空のシンボルと，各々の季節に割り振られた地上での人の営為。これらすべての上方では，かがやく斜塔がもう一つ別の連なりをなし，緋色の花々に縁取られた白いアーチと混ざり合って，乱舞する歓喜のよう。その只なかに，黄金の力も誇らかに，ギリシャの駿馬が胸を張って居並び，星群を配した青い地から，サン・マルコ寺院の獅子が浮き上り，最後には歓喜もここに絶頂を極めたかのごとく，アーチ群の先端は砕け散って大理石の泡となり，彫刻された水煙と閃光に変わって蒼穹に飛び入る。それはまるで，リドの岸辺に寄せる波頭が砕ける寸前に霜に凍り，海のニンフたちがそこに珊瑚と紫水晶を象嵌したとでも云うよう。

この寺院と，あの陰鬱なイギリスの寺院とのあいだには，何という隔たりがあることだろう。そこに蝟集する鳥にさえ一つの

タイプが見られる。嗄れた声で鳴き交し，寒々しい空に漂う暗黒の翼の鳥群に対し，サン・マルコ寺院の入口では，鳩が集って大理石の葉蔭に憩い，その生命ある羽は動くたびに彩りを変えながら，七百年のあいだ変ることなく，勝るとも劣らぬ愛らしさを保ち続けた彩りのなかに，なごやかな玉虫色の光を混ぜるのである。